第3章　やさしく、かしこく、たくましく
―「愛と勇気」の人権

第1節　【3－1】アフリカからの花嫁
～人種・民族・文化の違いを超えて

女子高生たちは、黒人女性のフィデアさんを見て、親しげに話しかけてきた。「どこからきたの？」「タンザニアから。」「えーっと。タンザニアってどこだっけー。」「アフリカよ。」「なーんだ、アフリカかあー。」そう言い残して、彼女たちはそそくさとフィデアさんの側を立ち去って行った。まだ日本に来て日の浅い、ある電車の中でのことだった。

また最近、こんなこともあった。故国のお母さんに送ってやりたいと思って、靴屋でゴザ張りのサンダルを選んでいた時のことである。「汚れるからあっちへ行ってくれ！」と言って、靴屋の主人は、フィデアさんを追い払った後、彼女が手にしたサンダルを、迷惑そうな顔でゴシゴシ雑巾で拭いていたのだ。

肌の色の黒いことにも、タンザニアという素晴らしい国にも、彼女は大きな誇りを持っていた。日本では肌が黒いことで奇異な目で見られることに一応の心積もりもあった。しかし、肌が黒いことを汚いことと勘違いされたり、アフリカに在る国というだけで、愛する故国を忌避されたりしたことには、さすがにショックだった。日本語が余り話せないので、何の抗議も説明もできない自分が、もどかしく、悔しかった。

「今度同じ靴屋へ行って同じことをされたら、日本語で抗議もしたいし、タンザニアの素晴らしさも是非伝えたい。だから、もっともっと日本語が上手になるように勉強するからね！」フィデアさんは、夫の小林一成さんに熱を込めて語った。

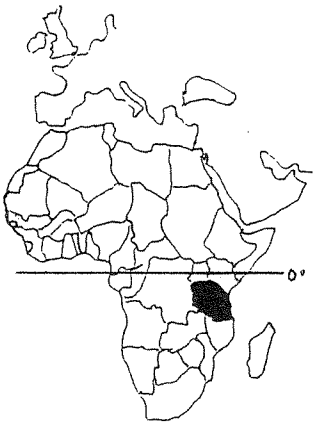
内心心配していた小林さんは、このけなげで前向きな妻の心の中に、世界一きれいなタンザニアの大自然と、人に温かいタンザニア人魂とが、凛として息づいているのを知って、改めて大きな感動を覚えずにはいられなかった。

北信の三水村出身の小林さんが、青年海外協力隊員としてアフリカ東岸の国、タンザアに赴任したのは92年のことだった。タンザニアでは国営放送局の視聴覚番組を担当した。ある時小林さんは、かつて隣国のマラウィから、独裁政治と虐殺とから逃れて千何百kmもの数奇な逃避行の末に、タンザニアに亡命してきた一家を取材した。障害者学校の先生をしていたこの一家の娘、フィデアさんとはその取材が機縁となって知り合った。小林さんは

任務を終えた後、96年に再度タンザニアへ行って結婚式を挙げた。

現在、小林さんは、三水アップルミュージアムの館長を務め、妻のフィデアさんはその近くのレストランに勤めながら、休日には英語の先生をしたり、日本語学校で熱心に日本語を勉強したりして活躍している。

多くの日本人は、アフリカ、と聞いただけで、槍を持った裸族が狩りをして、トカゲを食べている民族ではないか、と想像したりする。けれども、近代的な都会育ちのフィデアさんはそういう裸族をまだ一度も見たことがない、と言う。



結婚して日本に行くことを聞くと、フィデアさんの周りの人はこぞって反対した。「日本て国は、世界一差別の激しい国だって話だから、まして外国人などはとんでもない差別を受ける。なにしろ警察には忍者がいて、いつも国民を監視しているというし、日本人は、ヘビも食ってるそうだぞ。」

日本がそんな国ではないことは、彼女は夫から聞いて理解していたし、いつしか日本は憧れの国となっていた。何よりも愛する夫に、どこまでもついて行こうと決心して日本にやってきた。

三水村に住んで、片言の日本語しか話せない彼女に対して、いつも親切にしてくれたのは、昼間、村にいるお年寄りたちであった。お陰で次第に村人達と打ち解け合うことができるようになった。隣人とのつきあいの薄い都会ではなく、村に来て良かったという。

タンザニアでは、現在どんな小村にも学校があり、成人学級はどの町にも整っている。7年制の小学校は無料であるため、タンザニアは発展途上国の中では、教育が最も行き届いている国の一つである。キリマンジャロ山やビクトリア湖、野生動物の国立公園などの大自然と、ダルエスサラームのような近代的都市の混在している国でもある。

フィデアさんは、日本の老人たちが、腰が曲がったり、どの顔も寂しそうであることが不思議でならなかった。タンザニアの老人たちは知恵者として大切にされ、若者を叱咤して元気である。外国人でも隣人でも、お客は新しい知識を持ってきてくれる人として大切にされる。一成さんは初めてタンザニアに赴任した時、一日目は客人として、翌日からは家族として人々に親切にされたことを、懐かしそうに語る。

「タンザニアの子供に恵みを」という国歌にもあるように、子どもは未来の希望として大切にされる。障害者も神様から与えられた平等の命として敬意と愛情をもって扱われ、生き生きとしている。タンザニアが人権の国と言われる所以である。

主旨とねらい

この教材は、二人の国際結婚を題材に、偏見と差別はなぜ起こるか、また異人種・異民族・異文化間の理解はどうしたらよいか、を考える趣旨で取り上げたものである。また、フィデアさんが日本で自分に向けられる偏見に対して、明るく、積極的に乗り越えようとして生きているすがすがしい姿勢を学ばせたい。

我々の身近に国際化の波が押し寄せてきている中で、こうした問題に対する解決能力を涵養してゆくことが大切であろう。

日本人同士の結婚にしても、友人との交際にしても、個人個人は異文化の持ち主同士であり、互いの違いを乗り越えられなければ、交友は不可能であることを敷衍して教えることが大切であろう。

この教材の扱い方の例

討論・ディベート・感想文形式等で生徒に考えさせ、理解を深める。

(1) 導　　入

① アフリカに対して各々どんなイメージを持っているか、考えてみる。

② タンザニアについての基礎的知識を参考書や百科事典等で勉強してみる。

③ 本文を読む。

(2) 討論・ディベート等の論点（適当に抽出）

① 女子高生達はどうしてはじめはフィデアさんに親しげにして、アフリカの人と聞いて逃げてしまったのか。

② 靴屋の店主がそのような言動をしたのはなぜなのか。深く掘り下げて考えてみよう。

③ フィデアさんが日本に行く、と聞いて周りの人が反対したのはどうしてか。
反対に自分がタンザニア人と結婚してその国に行く、としたら、自分の周りの人達はどう言うだろうか。そしてそれはなぜだろうか。

④ フィデアさんが、周りの人の猛反対にもかかわらず、日本に行くと決心したのはどうしてか。（自分だったらどうするだろうか。）

⑤ 国際結婚は日本でも増加の傾向にある。自分の結婚相手がアフリカ人・アジア人・欧米人、或いは黒人・白人であったら、どうだろうか。根拠は何だろうか。

⑥ 日本ではお年寄りが寂しそうな顔をしている、との印象をフィデアさんは語ったが、自分の周りのお年寄りを見て、どうだろうか。

⑦ 障害者・男女は日本では平等に扱われているだろうか。

⑧ 偏見や差別はどうして起こるのだろうか。そしてどうしたら乗り越えられるだろうか。

補　足

タンザニアは日本の2.5倍ほどの面積を持ち、気候は大部分がサバナ気候区に属し、気温は高いが、湿気は少ない。先年この国のオルドバイ渓谷では、375万年前の人類の化石

や、親子連れの足跡などが発見されて以来、タンザニアは人類誕生の地としても有名になった。1975年、中央部のトドマを正式な首都とすることに決まったが、事実上の首都ダルエスサラームより規模も小さい。国民の80%は地方に居住している。

イギリスから独立して1964年にタンザニア連合共和国として成立。社会主義国をめざした。世界の最貧国の部類に入るが、初代大統領ニエレレは、外国からの経済援助で、何よりもまず教育に投資をして、今まで部族間の共通語のない国に、東アフリカの共通語であるスワヒリ語を、国内124部族の共通語として徹底させ、成功を収めた。また、6年制の中学（義務教育ではなく有料）では、徹底した英語教育を行っている。中学校では、総ての科目は英語で講義され、生徒どうしの会話も英語しか使用してはならないことになっている。従って、中学を卒業した者は、アフリカ東岸諸国の共通語であるスワヒリ語・そして国際用語である英語を使う能力を身につけることになる。ただし、現在、学校の数に比較して教員数が不足していることが悩みとなっている。

中学を卒業した者は、1年間の兵役を終えると、公務員の受験資格が与えられる。

ニエレレ自ら、タンザニア人は部族間の争いより、みんなが集まって、飲んでおしゃべりする方が好きな国民のようだ、と述べたように、何をするにも皆が集まり、喜びも悲しみも分かち合うウジャマー（家族的連帯）の精神が伝統的にあり、世界の最貧国で食糧難も深刻でありながら、飢える子供はいない。人権尊重の国と言われる所以である。

ただし、社会主義経済建設のためのウジャマー村（集団農場組織）の建設自体は、部族社会の自由度を無視して部族の強制移住などが伴い、生産力も落ち、挫折に終った。

またタンザニアでは隣国からの難民を受け容れ、貧しい国でありながら食料と土地を分けてやっている。難民をめぐり新たな課題も起きてきている。

参考文献：朝日百科『世界の地理』第11巻　朝日新聞社
ビジュアルシリーズ世界再発見『中部・南部アフリカ』同朋舎出版
『世界大百科事典』平凡社
『日本大百科全書』小学館

青年海外協力隊（平成8年度秋募集要項より）

自分の持っている技術・経験を途上国で活かす希望を持つ青年の道を開く為に、昭和40年から国の事業として発足。平成8年までにすでに1万6千名以上の青年を62カ国へ派遣し、現在も2千4百名の隊員が55カ国で活躍中。駒ヶ根市にも訓練所がある。問い合わせ（国際協力事業団青年海外協力隊事務局：東京都渋谷区代々木2-1-1新宿マインズタワー6F：Tel03-5352-7261